

5月に入って気温や水温も上昇し、オホーツク海沿岸でもホタテガイの幼生が順調に発生し、各地で採苗が始まっていることと思います。各地区の水産技術普及指導所が調査しているホタテガイ採苗情報については、網走水試のホームページをご覧ください。

今回は網走水試が今年4月から新たに取り組み始めた課題について、その概略をお知らせいたします。調査研究部では新たに▼「ホタテガイ中間育成高度化技術開発」に取り組んでいます。これは中間育成時における丸カゴと座布団カゴの機能差を調べ、その違いを考慮した中間育成技術の改善を図ることを目的としています。加速度センサーを取り付けて水中でのカゴの動きを把握し、水温や水深・流速などの物理環境と餌生物や付着生物などの生物環境の観測結果からカゴの違いによるホタテガイの成長差を検出します。その結果を中間育成技術の改善に活かしていきます。▼「ホタテガイ成長モニタリング調査」では、これまで継続してきたホタテガイの歩留まりや体成分などの観測と水温や栄養塩などの海洋観測に加え、連続記録計を用いたクロロフィル観測や連続採集型セジメントトラップ<sup>1)</sup>を用いた沈降粒子の採集を行い、より詳細な春季の餌料環境を把握することによってホタテガイ貝柱歩留不良予報の精度向上を目指します。▼「ICT技術による噴火湾養殖ホタテガイ生育状況モニター技術開発」では、函館水試に協力してICT技術を活用した養殖漁場の可視化と水温、塩分などの環境をモニタリングするシステムを開発し、養殖漁場の監視体制を現行よりも強化する方法を確立します。研究の対象は主に噴火湾の養殖ホタテガイになりますが、得られた成果は当管内の中間育成や湖内養殖などにも応用可能と考えます。▼「微生物群集評価技術（BIOLG試験）を用いた北海道のヤマトシジミ漁場の底質環境評価」では、さけます内水試に協力してシジミ幼貝の成長率が高い夏期に道内5箇所のシジミ漁場の水質と底質の比較を行います。底質については粒度組成、溶存酸素量にあらたにBIOLG試験<sup>2)</sup>による微生物群集の多様性調査を加えて漁場環境を解析し、シジミ漁場の適性評価の必須要因とその相互関係を検討します。加工利用部が取り組む▼「ホタテガイ外套膜を原料とした乾燥食品の品質向上」では、ホタテガイ外套膜が持つ結着性などの特性を活用し、乾燥食品の食感を改善して咀嚼しやすく手軽に喫食可能な食品の開発を目指します。また、食品加工研究センターに協力し、乾燥食品の風味増強やにおいの改善に適した調味料をホタテガイ外套膜から製造する技術を開発します。

これらの研究課題について、ご意見や調査等へのご協力をいただければ幸いです。  
(網走水試 上田)

- 1) 海水中を沈降するプランクトンの死骸や有機物、無機物などの粒子を集める装置（Sediment trap）。
- 2) 微生物群集の炭素利用による有機物分解能の多様性を市販のキット（Biologプレート）を用いて調べる方法。底泥中の微生物群集による有機物分解能の多様性が高いと良好な二枚貝の生息環境と推定される。